

とこなめ陶の森 陶芸研究所 企画展 ≪ 4月28日(土)～8月26日(日) ≫

日本遺産認定記念 「中世常滑窯」展

平成29年4月、六古窯は文化庁より愛知県内初の日本遺産に認定されました。この六古窯は常滑焼を含む瀬戸焼、信楽焼、丹波焼、備前焼、越前焼とともに中世から現代まで続く日本を代表するやきものの産地です。その一つである常滑焼は平安時代末期の貴族の時代から武士の時代へと大きく社会が変わる中で、現在の猿投の周辺から知多半島へとやきものを作る技術が伝わったのが始まりと言われています。今回の企画展では、日本遺産認定を記念して、平安時代末期から織豊時代までの常滑焼を展示します。

中世常滑窯で最初に作られたやきものは、山茶碗や小碗、片口鉢といったロクロで作る小さな器が主でした。しかし、1130年代に入ると、常滑ではヨリコづくりと呼ばれる紐づくりの技術で甕や壺といった大きなやきものを作るようになります。この頃に作られた甕は、北は東北地方の奥州平泉、南は九州の太宰府にまで船を使って全国へと運ばれていきました。

平安時代末期から鎌倉時代初期に注目されるのは瓦で、茶碗や甕と同じ土を用い、自然釉のかかった装飾性の高いやきものの一つです。中世瓦は大きな寺院や皇族の邸宅などの特殊な建築物に瓦が葺かれています。著名な建物では、京都の仁和寺や鳥羽離宮などで用いられていたことがわかっています。

壺類では、12世紀後半に流行した三筋壺が著名です。三筋壺は30cm以下の小型の壺で、肩から胴部にかけて三本の筋があることから名づけられました。知多半島では常滑市周辺の古窯で多く作られています。他の古窯では、越前窯や丹波窯で数例が確認されています。

片口鉢は注ぎ口が付けられた大きな鉢で、陶磁器愛好家には大平鉢と呼ばれているやきものです。常滑の片口鉢は内面に櫛目がありません。しかし、江戸時代に入ると他の窯業地の影響を受けて播鉢になります。また、平安時代末期はロクロと紐づくりの二つの技術で作られていますが、鎌倉時代中期の13世紀後半には甕と同じ紐づくりの技術のみで作られるようになるのが特徴です。

陶鍾は「イワ」とも呼ばれるやきもので、魚を捕る網の鍾です。常滑では平安時代末期から作られており、重さは40～200グラムのものが大半を占めますが、500グラムを超える大型のものまで作られています。

中世の常滑焼は今では使われることのないやきものもたくさんありますが、当時の社会が必要としたやきものです。その高い技術と自然美は今も多くのの人々を魅了する力を持っています。



自然釉三筋壺



宝相華唐草文軒平瓦



自然釉突帯長頸壺